猫の文学散歩

熊井明子

猫の文学散歩

熊井明子

集英社

猫の文学散歩

一九八〇年九月二五日　第一刷発行

定　価　九八〇円

著　者　熊井明子

発行者　堀内末男

発行所　株式会社集英社

東京都千代田区一ツ橋二―五―一〇

郵便番号　一〇一

電話　出版部（〇三）二二三〇―六三五一
販売部（〇三）二二三八―二七八一

印刷所　大日本印刷株式会社

製本所　株式会社石橋製本工場

検印廃止

乱丁・落丁本はお取替えいたします

©1980　AKIKO KUMAI, Printed in Japan

0095―783029―3041

猫の文学散歩 目次

第1章 セクシー・キャット

ガブリエル・コレット『牝猫』——9
アイリス・マードック『愛の軌跡』——14
シャルル・ボードレールの詩の猫——19
アーネスト・ヘミングウェイ『海流の中の日々』——25
谷崎潤一郎『猫と庄造と二人の女』——30
梶井基次郎『交尾』——37
ジャン・コクトオ『X氏の猫の話』——41
ジルベール・ガヌ『わが愛する猫の記』——46

第2章 ユーモラス・キャット

E・T・A・ホフマン『牡猫ムルの人生観』——53
夏目漱石『吾輩は猫である』——58
藤原審爾『シャム猫ロマンの放浪』——65
長部日出雄『猫と泥鰌』——71

小松左京『人間博物館』——76
マーク・トウェインの猫——81
城夏子『猫の運んだ手紙』——86
大谷藤子『六匹の猫と私』——92

第3章　夢の猫

エドワード・リア『フクロウとコネコ』——99
ルイス・キャロル『不思議の国のアリス』『鏡の国のアリス』——105
萩原朔太郎『猫町』——109
吉行理恵『男嫌い』——114
ジェイムズ・ジョイス『ユリシーズ』——121
金井美恵子『海のスフィンクス』——127

第4章　子供の守護神の猫

ポール・ギャリコ『ジェニィ』——135
今江祥智『ぼんぼん』——141
松谷みよ子『ジャムねこさん』——146
石井桃子『迷子の天使』——150
稲垣昌子『マアおばさんはネコが好き』——154
椋鳩十『モモちゃんとあかね』——158
L・M・モンゴメリの猫——162

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

第5章　ミステリアス・キャット

エドガー・アラン・ポオ『黒猫』——171
横溝正史『黒猫亭事件』——175
アガサ・クリスティ『アーサー・カーマイクル卿の奇妙な事件』——180
仁木悦子『猫は知っていた』——184

第6章　悲哀の猫

内田百閒『ノラや』——191
幸田文『ふたつボン』——195
田中澄江『犬と猫のはなし』——199
室生犀星『或るあはれ』——204
畑山博『片隅にひとりよ』——209
テネシー・ウィリアムズ『呪い』——215
ピエール・ロチ『二匹の猫の生涯』——221

第7章　伴侶の猫

大佛次郎『白猫』——229
森茉莉『黒猫ジュリエットの話』——235
レイモンド・チャンドラー『二人の作家』——240
マージョリー・K・ローリングズ『水郷物語』——245

佐藤春夫『田園の憂鬱』——249
トルーマン・カポーティ『ティファニーで朝食を』——255
マリー・ローランサン『夜の手帖』——260
芥川龍之介『お富の貞操』——263

第8章　猫ぎらいが書く猫

折口信夫『失題』——271
宮沢賢治『セロ弾きのゴーシュ』——276
A・チェーホフ『春』——279

第9章　眠り猫——未だ書かれない猫たち

フランソワーズ・サガン『心の青あざ』——287
石沢英太郎『その犬の名はリリー』——291
キャサリン・マンスフィールドの手紙の中の猫——294
杉本苑子氏の猫——298

本書で取りあげた猫の本——302

装幀＝野中ユリ

猫の文学散歩

第1章

セクシー・キャット

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

ガブリエル・コレット『牝猫』の猫は、夫婦の間に入りこみ、
しまいには妻をおしのけてしまう女以上に愛人的な猫。

ガブリエル・コレット＝一八七三～一九五四。フランス。

「猫好きの女って、何となく人間嫌いで、恋に縁が無い感じね」
と、猫嫌いの友人が、偏見にみちたことを言う。とんでもない。コレットの作品を読んでごらんなさい。

猫という最も官能的な動物を愛し、同化しきっていたコレットは、また恋の達人だった。それは、現実の生活にも、作品にも現われている。恋だけで作品がおろそかでは困るし、作品だけで実生活が枯れていてはみじめだ。二つが調和し、さらに猫が加わった三位一体、それがコレットである。

恋にからむ猫、猫にからむ恋の愛憎が、とりわけ鮮やかに描かれているのが『牝猫』だ。これは、甘やかされて育った美青年アランが、恋人カミーユと結婚するが、猫サハへの愛を断ちきれず、妻に激しく嫉妬される、という物語。

はじめのうちこそ、目新しい結婚生活に気をとられているものの、内心アランがサハを恋い慕うあたり、あたかも、過去の恋人にひかれるようである。いや、アランにとって、サハは、ある意味では恋人だったのだ。

彼は、結婚前は、ベッドでサハ相手にたわむれるのが、習慣だった。「ふくれた頬ぺたをした僕の小熊ちゃん……真珠色をした魔物」などと讃辞をつぶやきながら——。

彼が明りを消すとすぐに、猫はしとやかに彼の胸のうえをあるきはじめた。だが歩を運ぶたび

に一本の爪がパジャマの絹地を通して皮膚にまで当るので、彼はくすぐったい快感をこらえるのだった。（中略）

……彼はそう考えながら、刈られたつげやこのてがしわや、よく育った芝生の匂いのする、温かいが同時にひやりとする猫の毛並みを愛撫した。猫は咽喉一杯にゴロゴロという音をさせていたが、暗がりのなかで、一瞬アランの鼻の下に湿った鼻をのせると、鼻孔と上唇の間に猫の接吻をあたえた。非物質的ですばやい接吻、それはこの牝猫がまれにしかあたえないものだった……

新婚のベッドの中でさえ、彼はサハのことを思う。

ふと機械的に、彼は《サハのために》してやる愛撫をカミーユの身体の上にしようと思い、彼女の腹に沿ってやさしく爪を軽く当てていった……すると彼女はぎょっとして声を上げ、ぐったりしていた腕を硬くして、一方の腕で、あやうく彼が仕返しをしようとしかけたほどつよく、彼の頬を打った。

妻にしてみれば、夫がこれほどに猫に心を奪われていることは、我慢できなかったに違いない。特にサハを引きとり、共に生活するようになってからは、夫の愛人でも入りこんだかのような苦痛を感じたことだろう。サハの方も、アランの結婚で力を落し、鋭く自分の立場を意識していて、「夫婦の営み」の時間にはどこかに姿を消す。アランの方は許容しているのに——。緊張に耐えかねたカミーユは、サハを抹殺しようとする。彼女が、そしらぬふりでじりじりとサハをテラスの隅に追いつめ、六階から突き落そうとするくだりのサスペンスは凄い。

それにも失敗して、カミーユは身を引くことになるのだが、その最後の別れの場面など、猫を真から理解した人でなければとても書けないだろう。

……（カミーユは）だが一瞬躊躇しただけで、前よりも足早やに遠ざかっていった。なぜなら、

サハが番犬のように控えながら、カミーユが立ち去っていくのを人間のように見送っているそのそばで、アランがなかば身を横たえながら、器用な片方の手のひらを猫の足のように丸くさせて、緑色のとげのある、はやなりの栗をもてあそんでいたからだった。

猫が人間になり、人間が猫になる一瞬。ひたすら恋のヴァイブレーションを送り続け、辛抱強い女のように待ち続けた猫は、ついに恋の勝者となったのだ。

そういえば、倉橋由美子氏の『恋人同士』に出てくる牝猫のミカも、サハよりは稚いが人間以上にセクシーだ。彼女は、はじめ、飼い主Kの恋人Lが飼っている牡猫ヤンニにひかれる。そのため奇妙な四角関係が生れるが、結局Lの座を奪い、Kの恋人となる。この場合も人間の女以上に猫が女っぽいところが面白い。

コレットという作家は、もともと「彼女の中にはあらゆる動物たちの美しさがみられる」といわれたくらい、奔放で野性的で、しんから女性的だった。言葉は彼女の内部から豊かにあふれた。結婚したり、離婚したり、ミュージック・ホールの踊り子になったりしながら、彼女は恋の数と同じくらいおびただしい作品を書いた。パリで晩年のコレットに可愛がられた深尾須磨子さんはよくコレットの思い出話をしてくださったものだ。

「コレットはすばらしく愛情深い作家で、私は、師と思って尊敬していました。でも、猫だけはいくらコレットにいわれても、とうとう好きになれませんでした。『動物の対話』や、『シェリ』を訳したのにね……」

と残念そうに言われたことを思い出す。

私がはじめて『学校のクローディーヌ』と『パリのクローディーヌ』を読んだ時から、もう二十年以上もたつ。その生き生きした自然描写と官能的な少女の描写、そしてとりわけユニークでセンシャ

スな猫の描写に心をうばわれて、赤い表紙の小さいノートに、所々書きぬいたものだった。
その後読んだ『クローディーヌの家』には、思わず猫を飼いたくなるところがあった。
わたしの不在中に、なんとたくさんの宝物が生まれていたことか！　わたしは、どれがどれと見わけのつかない猫たちであふれている大きな籠のところへかけよった。このオレンジ色の耳は、ノノッシュの子にちがいない。けれど、あの、アンゴラ系の、羽根飾りふうの黒いしっぽは、どれの子のだろう？　――『クローディーヌの家』の『わたしの母と動物たち』

雑種猫バンザイ！

このようにコレットの素晴しさは、恋にからむ猫だけでなく、あらゆる場の猫の魅力をうたいあげたことだろう。『動物の対話』の『ミュージック・ホール』に出てくるキキのように人間を冷静に、皮肉に見る猫もあれば、『動物の平和』の『母猫』のようにいじらしい母性愛を示す猫もいる。あるいは『十月』に出てくる「わが家の装飾品であり、忠実で、横柄な主人役」であるアンゴラ猫もいる。

……やわらかい毛でおおわれたサルビアの葉のように、灰色の白楊（はこやなぎ）の葉のように、朝露にぬれた蜘蛛の巣のように、咲きかかる柳の花のように銀色をした……

豪奢なアンゴラ猫たちである。

とにかく、彼女の作品の中の猫たちは、言葉の限界を超えて、愛らしく生き生きとして美しい。読みかえすたびに、魔法の眼鏡を与えられたみたいに、現実の猫の愛らしさ、美しさが見えてくる。

もちろん、コレットは、猫を描くときだけ冴えているわけではない。男も女も彼女の手にかかると、生き生きと動き出して、私たちに迫ってくる。しかし、私は、そうした人間描写にもまた、猫の美しさが投影されているような気がするのだ。たとえば『シェリ』である。『シェリ』は、四十九歳の高級娼婦上りの女レアと、美しすぎる青年との愛の生活を描いているのだが、そのレアが、シェリ

を見る眼差しが、猫を見るようなのだ。

……ねむっている男の手がだらりとなって、怖ろしい爪のついた細っそりした指が萎れた花が落ちるように垂れさがった。それは（中略）レアがこれまで何度となく、なんら追従の気持もなく口吻を、ただ楽しみのため、ただその香りのよさのために口吻をした手であった。

この部分など「男」を「猫」としてもよいと思うが、どうだろう？

猫たちのゴッド・マザーであり、猫について書く者たちのゴッド・マザーでもあるコレット。コレットの猫作品を読んでいると、生きていくことが、限りない可能性を秘めた、楽しいことに思われてくる。彼女のような官能的な生き方は素晴しいと思う。習慣とか、道徳とかいうものは蹴とばして、のびやかに生きるとき、女は猫の美しさに近づき、恋の、人生の勝利者になれるものらしい。

『夜明け』の中で、コレットは、

……わたしはもう誰とも結婚したくないが、大きな、大きな猫と結婚することはまだ考えている。

と語る。このとき彼女はもう五十代。悠然と生活を愉しみ、淡々と猫とたわむれる彼女を、一人の青年が熱っぽく恋し、彼に振られた娘が嘆く。それをコレットは、半ば困惑し、半ば愉しんでいるようだ。いわば『牝猫』のサハ役を演ずるコレット。「大きな猫と結婚」という言葉は、ジョークっぽく、しかも本心が透けて見えるところが憎い。

アイリス・マードックの『愛の軌跡』の猫は青い麦のような少年少女のもどかしい恋にまつわる。

アイリス・マードック＝一九一九〜。イギリス。

恋愛小説の中で、アイリス・マードックの作品ほど入りくみ、複雑で強烈なものは珍らしい。私は、どちらかといえば、幻想的な恋愛小説が好きだけれど、マードックには何となくひかれて、訳されたものは全部読んだ。

いつか、ロンドンからやって来た猫好きのカメラマンと話していて、マードックに話が及んだら“bloody”と顔をゆがめたことを思い出す。同性愛、不倫の愛、近親相姦などが悪夢のようにからみ合うマードックの世界を、彼のように異常と決めつけて排斥する人もいるけれど、生身の人間の愛や憎しみと、伝説や古典や哲学が作り出すアラベスクは、〝読む愉しみ〟を味わわせてくれる。

それに何より、猫がよく出てくるのだ！　特に、私が一番好きな『愛の軌跡』では、猫が、少年少女の恋にからみ、きわめて重要な役割を果す。（なお、この作品の訳者、石田幸太郎氏は、マードックの来日の折りに会談され、『アイリス・マードック夫婦との二時間あまり』というエッセイを発表されている。石田氏もまた大変な猫好きで『昼さがりの風景』には、若き日からの心暖まる猫との交流が描かれている。実に愉しく、味わい深いエッセイ集で、猫と英文学にひかれる人には是非御一読をおすすめしたい）

さて、『愛の軌跡』の舞台は、英国政府高官のオクティヴィアン・グレイと、その妻ケイトが住むドーセットの海辺の館。物語は、オクティヴィアンの部下が庁舎で自殺する所から始まり、その事件

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.